

舞台上の經驗が

やはり一番大切

文樂座 人形 吉田 榮 三

見とくなはれこの左の小指を、どうだす右にくらべてこないに大きおましやろ、これはあんた
胴串を支へてるさかいだつせ、重たい人形の頭がこれ一本でもつてゐるのだすよつてこないにな
りますのや、ほかの指で、眉毛を動かしたり、口をあけたり、眼をきよるくさしますのや、こ
の胴串は人形の胴のなかに入つてますさかい、めくらさぐりだす。そやかてめつたに間違へるも
んやおめへん。ほんなら右手はなにをするのやといひなはんのだつたか、あほやな、あんた見てな
はれへんのか、人形の右手をつかひまんのだすが、めくらやなかつたらありや見えまつしやろが
これが胴心だつせ、兩肩のそこへ、へちまを入れて、ふんはりとした柔かき出しまんのや、こ
の肩枝の真ん中へ胴串を入れてこれこの通り動かすのんだす、斜に棒が出てまつしやろ、これ
肩を動かしまんのや、そやけど右も左もつかつてゐるさかい、一體どこで操るのや思ひはります、
これはこう腕にあてたり、胸にあてたりしてやりまんのや、これでわたいの役はすんだやうなも

のですが、ほんなら人形の左手はどうするのやちゆうと、これにもまた一人の男がかゝつてまつしやる、この人形つかひの左手は全然あいてかちゆうと、そやおめへんで、一寸ものをとつたりするときにかひぞひしますのや、それにもう一人の人形つかひが足を承つてゐますのや、これで一つの人形が自由に動くのですさかい、人形が五つも出ると、わたいらが十五人も舞臺に出るわけです。……そやさかい、三人の心が一つにならんと、ちぐはぐになつて芝居の出来るものやおめへん、そんならどないにして連絡するのやといひなはつても、これは天然のものだすな、だいたい、この藝道の修業が天然のものだす。どないに頭のえゝ人やいうても、三年や五年でひとさまの目にとまるといふ藝道やおまへんし、樂屋のうちの稽古だけではどないにもなりまへん、どないしても舞臺に出てゐるのが稽古だす。第一に三味線の間、太夫とのいき、これを知らんと、何んにもなりまへん、もつとも手や足の動かしやうには、きまりがありまへんが、それだけしか、樂屋うちで稽古はできまへん、そやよつて、自分の役がすんだいうて、遊んでゐるやうではものになりまへん、十年廿年してもやつぱり足だけしかもてん男もゐるわけだす、どないしても、しよつちゆうほかの人の藝を見てゐんとあきまへん。初めは芝居の後見みたいなことをしまして、それから足、これでまた修業をつんで左手になり、しまひに主づかひとなる順序だす、この人形の胴はわたいより大きいのがいくらもおますぜ……だいたいわたいのはチビだすが……それに

らべては、手足や顔が小さいのは、ちよつとをかしおますが、あれが舞臺にかゝると不思議に不
 調和に見えまへん、それが均整のとれた陳列のなかの人形では、をかしなものになるんだす。こ
 んな小さい顔の表情は、東京の歌舞伎座のやうな大きい小屋では、おしろから見えまへんよつて
 さういふときは、大きく身體をうごかしたり、頭をうごかすことにして、お目にかけるやうにし
 ています。まだなんどおますかい、人形の指が動くかて？……そりやこの通り握つたり開いたりし
 ますやおめんか。ひと指づつ動かしてみいて？ そりや無理や、あほうなこといはんと、はよ去
 になはれ、七月ごろまた東京で會ひまひよ……